

通潤橋架橋百五十周年記念事業

南手新井手記録

第一話 橋が架かるまで

布田保之助と上妻半右衛門

あらすじ

第一場 (天保十三年七月—1842— 南手在 愛藤寺の路傍)

通潤橋架橋十年前、布田保之助と会所役人が南手の村で干害の視察をしている。道端で飲み水を選んでいる村の子等に会う。供の役人が、子等の将来の暗さを語るのを聞いて、南手に水を引くことを心に誓う。

第二場 (弘化四年三月 —1847— 惣庄屋 布田保之助の屋敷)

砥用の霊台橋の竣工に立ち会った保之助は川を跨ぐ大橋を、石で作ることが可能であることを目の当たりにして、早速、石工宇一、丈八兄弟との交渉を持つ。

第三場 (嘉永四年八月 —1851— 郡代 上妻半右衛門の屋敷)

郡代上妻半右衛門の理解の下、手永の灌漑事業を進めてきた保之助は、上妻の屋敷を訪れ、南手新井手普請の申請を打診し其の必要性を力説する。上妻は、保之助の要請に心が動くが、藩の情勢から申請の時期を明くる年(嘉永五年)の二月まで延ばすよう勧告する。上妻の転勤を予知していた保之助は、自らの生涯最後の灌漑事業を上妻と共に成し遂げたいと訴える。

第四場 (嘉永五年二月 —1852— 笹原川こむかりせ 樋試験場の普請小屋)

保之助達は、石橋の架橋と通水の樋の完成を目指して、研究に専念する。特に水圧の概念が無かったことから、松板の樋の試験は無残な結果に終わる。約束の南手普請申請の嘉永五年二月、笹原川の試験場で何とか石樋の技術的見通しをつける。

第五場 (嘉永五年九月 — — 惣庄屋 布田保之助の屋敷)

申請後、四月になって、南手普請に関して、藩より十二か条の質問状が届く。それに回答を送るが、九月になっても許可は下りそうもない。藩の状況から、時期を待つのが良策だと話す横目の石坂と、会所の佐野が口論となるが保之助に諭される。そこへ上妻が忍びで来訪し、樋の材質を軽い松板にする現状打開の秘策を授ける。

第六場 (嘉永五年十一月十六日 矢部手永会所内)

十月、上妻の助言に基いて提出された申請書に対して、十一月に藩からの許可が下りてくる。財源の心配をしながらも架橋に心を燃やす会所内。

第七場 (嘉永六年八月 —1853— 郡代 上妻半右衛門の屋敷)

石材や下橋の木材など、資材の切り出しの真っ只中。藩からの財源確保の礼や、近況報告のため保之助は上妻宅を訪れる。上妻は其の席で、樋の材質を松板から元の石に仕替える願い書を再提出するように指示する。十月には下橋普請に取り掛かる予定。

第八場 (嘉永七年三月 —1854— 南手吹上橋の吹き上げ口)

石樋に替える許可も下り、嘉永七年三月、石橋もほぼ竣工して、下橋取り除きの日を迎えた吹き上げ口。工事途中なので工事関係者や、噂を聞いて集まった村民たちの見守る中通水試験が行われる。

第九場 (安政三年正月 —1856— 奉行 真野源之助の屋敷)

安政三年正月、布田保之助、上妻半右衛門、目付石坂禎之助、奉行真野源之助屋敷へ新年の挨拶を訪れる。南手吹上橋の命名の書付が真野源之助より保之助に渡される。

第十場 (文久元年大晦日—1861— 嶋 一筆の津留隠居宅)

文久元年、惣庄屋の役目を息子弥門に譲った保之助は、嶋一筆と名を改め南手在の下緑川の岸边、津留の地に隠居する。雪の舞う大晦日、妻女益との語らいの中で南手新井手普請に懸けた想いを吐露する。夜明け(明治元年—1868—)まで七年を残すのみ。

郷土劇 南手新井手記録

【キャスト】

矢部手永惣庄屋	布田保之助	倉岡盛雄
布田の妻女	益	吉本登代子
奉行	真野源之助	坂本明士
真野の妻女		甲斐英子
侍女		工藤サ千子
上益城郡代	上妻半右衛門	高岡隆史
上妻の妻女		柴田尚美
手付横目	石坂禎之助	下田房夫
矢部会所下代	佐野一郎右衛門	柴田敏光
測量方	赤星九郎助	阿部主税
矢部会所手代	高橋文治	中村豊光
矢部会所添手代 (添口)	工藤宗次郎	甲斐鴻生
矢部会所詰小頭	石原平次郎	嶋田浩幸
番匠頭	茂助	田上祐元

石工頭	卯一	田上博之
石工	丈八	西田武俊
百姓	弥平	坂田弘明
百姓	利八	中村豊光
百姓	みの	吉本とよ子
百姓	儀助	梅田隆利

【子役】

第一場 ○高松将史 ○荒木健太郎 ○藤川卓也

○木原隆介 ○甲斐陽来 ○友田衣美

第二場 ○齊藤奈菜 ○渡辺ゆい ○坂本龍芳

○坂本わかな ○坂本みのり

第三場 ○木原昂亮 ○高松将史 ○木原隆介

○友田衣美 ○荒木優里

第四場 ○伴 祥太郎 ○伴 剛志 ○伴 朋恵

○荒木健太郎 ○蔵原しほり ○今井理衣

第五場 ○大林博昭 ○齊藤奈菜

第六場 ○村上哲也 ○藤川侑樹

第七場

○ 甲斐陽来 ○ 齊藤健志郎 ○ 田代みなみ

第八場

○ 吉山夏帆 ○ 藤川侑樹 ○ 下田彩加

○ 田上有里 ○ 藤川卓也 ○ 村上哲也

○ 坂本茉菜美 ○ 成瀬真奈美

第九場

○ 高畑朋幸 ○ 木村恭平 ○ 大林博昭

○ 荒木春香 ○ 岩崎まい

スタッフ

作・脚本 | 前田和興

演出 | 後藤孝徳

演技指導 | 前田和興

演出助手 | 山崎 咲

舞台監督 | 後藤孝徳

舞台助手 | 国武昇示

【舞台美術】

大道具 | 尾上一哉

小道具 | 榊 伸三

音楽・音響・効果・映像 | 片山精次郎

照明 | 山下雄一

助手	平田和之
助手	後藤翔太
助手	中塚晶人
助手	日隈光治
助手	小田原淳一
時代考証	田上 彰
男子所作指導	石井清喜
女子所作指導	真野かよ子
衣装協力	村山千春
助手	松田美智代
助手	西岡鈴子
児童演技指導	真野かよ子
児童演技指導	甲斐英子
児童演技指導	下田美鈴
児童演技指導	山下淳子

【協力】

かつら——はぐるま座 ○音響協力——矢部一座

○舞台美術——江口事務所 ○衣装——吉本美術

○着付・メイク——日本和装学園熊本総合学園長 山田京子、

西岡美容室

——ナレーション——（第一幕の前）

此処は、細川のお殿様の御領地で、

熊本の御城下から、日向の御領地に抜ける道筋の、

丁度中程にあたります矢部手永と申す処で御座居ます。

手永内の村々は大村だけで七十と六。

その手永の一番南に集っております村が十ばかりありまして、

手永の南に在るということから、南手と呼ばれているのでございます。

私の在所は、その南手の小さな村、

それも、六つの村全体が、東、南、西の三つの深い谷の川筋と、

北は、浜町という盆地に囲まれた、

それは、それは水の乏しい在所でございます。

私の家、家と云うても、ほんの伏廬(ふせいお)でございまして、草に生い崩されかかった藁の屋根と、

下げ筵がなければ、所々庭が見える土壁や、

何時敷き替えたやら覚えも無いような、

破れ畳に藁を梳(と)き敷いて、寝起きを致しますのが常で御座居ました。

そんな有様ですから、生計(たつき)の中味等は、

それはもう御想像にお任せする外は御座居ません。

惣体、水の利の乏しい百姓の苦しさや悲しさ、

それにも勝る悔しさは、

他人様では仲々、お分り戴けるものでは御座居ません。

けれども、今は、こうして、餘る程の養水(やしないみず)で、

子供や孫も一家打揃いまして、田に畑に精を出しております。

何故、私の在所に、このように多くの新しい井手が走り、

水がこのように参ったかとお尋ねなられる？

左様で御座居ます。その水の経緯(いきさつ)が、

これからお話いたします南手新井手記録なので御座居ます。

私共の村々を束ねておいでなのが、庄屋様でございしますが、

そのまた庄屋様を束ね、手永を御支配されておられるのが、

御惣庄屋様で御座居ます。その代々の御惣庄屋様が、

おそらくお考えにもならなかったこと。

この南手の村々に水の流れをお作りになられた

第十六代矢部手永御惣庄屋、布田保之助様と

時の郡代上妻半右衛門様のお話。

手永の会所にお務めさせて頂いている私の遠縁の者より、

耳に致しました事も混えて、御覧に入れまする故、

どうぞ最後まで御ゆるりとお楽しみ下さいますように。

―映像とナレーション―

享和元年より

天保十三年迄の天災と損毛高(そんもうだか)。

―映像の流れ、読上げ共に二分間

初めの十年と終の十年をロールライト

天保十三年で止め、七月のアップ―

―天保十三年

当夏秋旱損(ひでりそん)水害 損毛高十六万六百七拾石余

七月

通潤橋架橋着工十年前。―

第一幕

第一場（架橋十年前）

「保之助、南手旱害見廻り」

天保十三年七月 早朝

場所 白石村相藤寺の畝傍

キャスト

惣庄屋 布田保之助(42)

測量積方 赤星右之助

下代 佐野一郎右衛門

村人 弥平

村人 利八

村の子供 数人

— 保之助、赤星、佐野、測量の下見を兼ね早朝の見廻り。

赤星、地図を眺めながら。――

赤星

左様でございます。五老ヶ滝の滝上に磧を築き立てましても、小原、長野、犬飼に水は掛りませぬ。ほぼこの辺りが頂きで御座居ましよう。

佐野

岩尾のお城のお櫓台から樋を掛ければ、南手は皆潤うのだがな。

赤星

佐野様。またそのような。ご冗談を。惣庄屋様の耳に入ります。

布田

気にせずともよい。それにしても去年は長雨、今年は照り、このままでは穂枯が出ねばよいが。

佐野

暑気(しよき)がさほどでもござりませせぬ故、虫の害は無いように見えます。そう云えば、藤崎のお宮では、近々雨乞いの祈禱をなさるそうでございますな。

布田 うむ。村々でも雨乞いの声が聞こえ始めておろう。

この様な山間(やまあい)では、何処(いずこ)も井手筋が整わなくては、上田(じょうでん)を作ることは出来ぬ。

それにしても、叔父の太郎右衛門殿の井手、

塘(とも)の御仕事振りは見事なものであった。

儂もあのように、

民を預る務をいささかなりと果たしたいものだの。

赤星、佐野 ははっ。

―村人下手より登場―

弥平、利八 これは、大旦那様、お日和でございます。

お役目、御苦労様で御座居ます。

布田 うむ そなた達には難儀な日和だの。

今も、この在に、養水を移せぬかとの参談をしていたのだが、仲々仕法が見つからぬ。済まぬことだの。

弥平

勿体なか。わしらはここの生まれですけ、仕方ないことと思つとりますけども、駄(だ)養(やしな)いの水がどうにもならんのですが。あいどもは、がまん性根がなかですけん。

利八

駄がおれば養いが要りますけん、夫賃取りがよかというて、こんな時期は、村にだあれもおらんごつなりますばい。

佐野

これ、ご無礼なことを云うてはならぬ！

布田

よいよい、かまうな。ときに、宗兵衛は見掛けなかつたか、家にはおらんのだが。

弥平

庄屋さまは午前(ひまえ)に津留に行くといつて下りおらしたでど。なあ。

— 弥平、利八を見る。利八頷く。 —

布田

そうか。もし、出合つたなら、明日会所に出向く様伝えてくれ。朝のうちとな。

弥平、利八 お伝えしときます。ほんじゃ御無礼させてもらいます。

— 弥平、利八、丁寧に辞儀をして上手に去る。

入れ替わりにヨイショ、ヨイショの掛声がして上手から子供達
六人登場

二人が担棒の中央に大きな水桶を下げて、重そうに運んで来る。

舞台中央でドンと下す。—

— 一人は手に花の咲いている野の草の束を抱えている。—

子供(一) もうきつかぞく。

— 仰向けに大の字になる。一人は座り込む。

— 一人が桶を覗き込む。 —

子供(三) ああア、こんなに零してエ、勿体なかア。

子供(二) うるせエ、自分で運べ。

ぬしがもっと草を入れんだったけんだろが。

女子んごつ花ば抱えち、皆桶に入れんかア。

—子供(三)、澁々草花を桶の中に浮べる。少しベソをかいている。—

子供(四) 担わんもんには呑ませんとばい。

子供(五) そげなこと云うもんじゃなかよ。トモは弱かただけん、

ついてくるだけでもよかと。さ、行くばい。

はやく担ぎなつせ。交替々々。

—子供(四)(六)、(一)(二)と替って。—

子供(六) トモ、泣くな。いくぞ、それ、ヨイシヨ、ヨイシヨ。

子供達 ヨイシヨ、ヨイシヨ

—子供(三)、道傍の草を摘んでから後を小走りに追って去る。—

保之助達、子供達を見送って—

佐野 無邪気なものです。もう、上の出水は枯れてしまいましたしょうから、

下の水壺まではかれこれ半道はかかります。

子供達にはきつい仕事でございませうな。

布田 あの子供達は日にどれだけ、下るのかの。

佐野 午前に三荷(か)、あとに二荷、五度(いつたび)は運ぶと聞きました。

赤星 あの子等も所よく生まれておりますれば、十年後には良き百姓にもなりましようものを、不憫なものでございます。おそらく、生計(たつき)の足しに、町屋の奉公に出されましよう。女子であれば、売られもすると宗兵衛が申しておりました。

— 布田、黙して子等の去った後を見遣っている。 —

赤星 さ、次は新藤廻りといたしまししょうか。

日の明るい間に、先の月、

明高(あけだか)となりました処を御見分下さいませ。

布田 うむ……。佐野、そちは先程、岩尾城の櫓台と云うたの。

佐野 は？

布田 いや、よい……岩尾城の櫓台……
では、参ろうか。

— 三人、下手に歩み去る。 —

— 暗転 —

第一場了

―ナレーション― (第一場と第二場の間)

このナレーションは、幕の手前で、子ども達が、唄あそびをしながら語るとよい。

子供(一) この日、御惣庄屋様は、南手村の御見廻りの後に、

そのまま岩尾のお城の御櫓(やぐら)台の跡に登られ、

川向いの岸の高みを長い間お眺めになっておられました。

そして、御同行のお役人様に「遠いのお」と仰られて、

お下りになられたそうでお座居ます。

子供(二) それから五年の年月が経ちました。

この年、おとなりの砥用の手永に、霊台橋という名前の

今まで見た事もない大きな石の目鑑橋ができたとのことで、

何でも布田様はそのお祝いの席にお招きになられたとのことで

御座居ました。

子供(ω)　　そこで見ましたのは、今迄見たこともない、

それはそれは大きな橋でしたそうな。

石工ならこのような橋が架けられるのだ…。

布田様にとってこのときから、

五年前にあのお櫓台から眺めた南手の遠く高い岸が、
もう、手の届く程、近くに見えたのかも知れませんが、

さっそく、石工方とのお話が始まります。

第二場（架橋五年前）

「砥用靈台橋完成後。

保之助、石工に協力を頼むの場」

弘化四年三月

場所 布田宅

キャスト

惣庄屋

布田保之助(47)

石工

卯一

丈八

―保之助、卯一、丈八、靈台橋の設計図を囲み討議中。

丈八、一尺位の指示棒を持って説明。―

卯一 御覧下さいませ。

これが布田様が車橋を架けようとお考えの場所に

ございます。そしてこの図が砥用の橋の同じ規矩(きく)合(あい)

のものでございます。小原側の岸上の高さを基に見立て

千一つの傾きで樋を掛けますれば、

城山側の岸上のこの高さで結ぶことになります。

この線と川の中半の川底との高さを測れば、落込口の仕法を勘考

しても、おおよそ十五間を越えるやも知れませぬ。

御承知の通り、私共が手掛けた車橋の大きさは、

砥用のものに過ぐるものはございません。

布田様のおっしゃる橋は、これよりも五間高くなり、

橋中三間をとり、たとえ橋の足懸りが据えられたといたしましても、

折れない屏風を立てるが如くとなり、

とても風雪、地震に向えるものではございませんし、

私達の手には、遙かに余るものでございます。
これはもう、布田様がいかに仰られても、
御辞退申し上げるより術はございませぬ。
誠に申し訳ございませぬ。

布田　　ううむ……。左様か。

—長い沈黙。保之助、思わぬ答えに落胆の色を隠せない。
ややあつて—

布田　　相分った。さすれば卯一、そなたの仕法の橋の寸法は、
いかなる目算となったのか、示してくれぬか。

卯一　　はい。

—卯一、丈八の手より図面を受取り、
広げである図に重ねて広げる。—

卯一

さすれば、かように御座居ます。

先ず、兩岸の裾を一間ばかり押込(おしこ)み、橋の足を築立(つきた)てます。

二つの足の裾の間の川底の中はおおよそ九間、

足高を二間としてその上に十間円の輪石を掛けます。

輪石と築石と合わせて一間、都合八間が橋の高さとなります。

しかし、これではお望みの十五間には七間も足りませぬ。

兩岸の石の性(しょう)をいま一度、

確めて見たいとは存じますが、根石を広く巻いても、

あと一、二間がせいぜいと存じます。

——布田の表情が厳しくなる——

布田 卯一！

卯一 は？！

布田 卯一。これはいかにしても、

儂が仕遂げねばならぬ仕事なのじゃ！

卯一 はっ。

—保之助、再び穏やかな表情に戻り—

布田 この仕事は、この仕事はな卯一、

人馬が日々の便、不便で渡る為に作る橋ではないのじゃ。

この橋を渡る水を待つ村々は、

お主も見通る通り四方を深い谷に囲まれ、

川越(かわごし)の水脈が断たれた上、惣体は寒所で、

本方(ほんかた)の上田などは数える程もなく、

田麦が穫れるところは、六ヶ村で八反余りしかない。

照る日が続けば、十四、五尋にも及ぶ井戸も枯れ、

物濯(ものあらい)などは雨水を溜て用い、

飲み水も遠き道を子等が水桶を担いて運ぶ難渋の有様じゃ。

それ故、本来の百姓小前の道のみでは、

生計(たつき)の見通しはなく、

僅かな工商を兼る故、風儀も宜しくない。

これ迄も、日夜零落立直しの手法につき、

種々に案勞を重ねて来たのだが、

仲々に思いを遂げることはできなかつた。

それ故に、この水取りが僕の生涯の心懸りを果してくれ
最後の普請と願うておる。

それ故、のう卯一、

僕も樋掛(といがけ)の仕法については、

廻江(まいのえ)の見合いもあり、

いささか思うところがある。

明日からも又、見分に掛り、心魂を砕き研究致そう。

さすれば神仏も、新たな知恵と力を与えてくれるやも知れぬ。

しかし、僕一人の力では如何ともし難いこと。

これは、どうあつても、

お主達兄弟の力を借りねば叶わぬ事なのじゃ。

あの霊台の大橋を架けたお主達の力を見込んで、
頼む、僕に力を借してくれぬか。この通りじゃ。

—保之助が頭を下げるのを

丈八がおし留めるように膝を進めて—

丈八 分りました。やらせて戴きます、惣庄屋様。

そのようにお頼みになられて、

お断りすることなどできることではございません。
なあ、兄さん。

—卯一も大きく頷く—

わし等石工の修行も、天井など御座居ません。

南手在の百姓の難儀を助ける事にこんな肩でもお役に立つのなら、
石工冥利に尽きるといふものでございます。

石工は、言葉では動きません。

惣庄屋様の心意気で働かせていただきましょう。

儂等は、橋を高く押し上げる、

惣庄屋様は水を高く押し上げる。

これは、競(きそ)い合いでございます。

こちらこそ、どうか宜しくお願いいたします。

—保之助、二人の視線をしっかりと受け止めて—

布田　　そうか、受けてくれるか。

有難い、有難いぞ丈八、卯一。

苦勞は短くはないやも知れぬが、

共に背負いて仕遂げようぞ、よろしく頼む。

— 保之助深々と頭を下げる。石工平伏。 —

— 暗転 —

第二場了

―ナレーション― (第二場と第三場の間)

子供(中) 布田様とお約束を交しなされたあと、

石工方は、その後、大層な修行をされに、

あちらこちらに参られたそうで御座居ます。

なんでも、肥前長崎の方まで行きなされたとか。

子供(中) 布田様のお仕事振りも、大変なもので御座居ました。

この手永には、村々を結ぶ道らしい道がありませなんだ。

道が通えば、物も心も通うものでございます。

布田様は、その道を数え切れぬほどお開きなされた。

子供(中) そうそう、あれから幾月もしない内に、

御郡代様が荒木様から上妻様に替られましたの。

それからはどうも井手筋を開かれることが、多くなりました。

耳伝えによると、上妻様と布田様はとてもお気が合われるとか。

子供(㊦) 昨年の末からは、中島の福良井手の御普請とやらが始まり、それは、大層、大掛りなものだそうで御座居ます。井手のお話は水のお話、何か私共南手の在所にも、良いお話があるかもしれないと話し合ったことで御座居ました。

第三場（架橋一年前）

「保之助、郡代上妻と奉（ほう）願書（がんしよ）提出の準備談議。
願は来年出せの場」

嘉永四年八月（雨多し）

場所 上妻屋敷の座敷

キャスト

郡代 上妻半右衛門

惣庄屋 布田保之助（51）

上妻の妻女

―上妻家の奥座敷、座布団が二つ、茶受が各々出してある。

保之助、上妻の妻女に案内されて登場。―

妻女 ささき、どうぞお通り下さいませ。

上妻も、ほどなく戻ると存じます。

―座布団の上を一撫でする。―

布田 八つ頃はよいだろうとおっしゃられましたが……、

少し早目に着いてしまいました。

もしや、遠方にお出掛でございましたのでは。

妻女 いえ、何か、真野様がお呼びだとか申して、

あなた様がおいでになられましたら、

お待ち下さるようにと申し付けられております。

ささ、どうぞ御安座なされてお待ち下さいませ。

……あ、戻ったようでございますよ。

——妻女迎えに行く。——

妻女の声 お帰りなさいませ。

たった今、布田様がお見えになられたところです。

上妻の声 そうか。

——足音がして上妻下手より登場——

上妻 お、保之助来たか、早かったの。

—保之助座を正して—

布田 御無沙汰致しております。

久々で下って参りました。

上妻様も御健勝の御様子、何よりと存じます。

上妻 まあ、辞儀はよい。道中大変であったの、

供の者は連れずか？

布田 いえ、今日は利三郎を連れて参りました。

少々持ち物も御座居ましたので。

—上妻、座りながら—

上妻 そうか、ところで福良井手の方はどうだ。

うまくいっておるか。

布田 は、中島の方は、先般のお申付のお蔭を持ちまして、

百間毎に雨水の吐口(はげぐち)を設ける段取をいたしております。

有難う御座居ました。

上妻　　そうか、大分色が黒くなったの、石坂に聴いてはいるが、
体はいとえよ。

布田　　有難う御座居ます。

――妻女、茶果を持って登場。
二人の前に運ぶ。二人茶を口にして――

上妻　　で、今日の用向きは何事かな？

――布田、しばらく口を開かない。――

上妻　　ん？どうした。

布田　　はい。上妻様……。

お蔭を持ちまして、先程申し上げました中島の井手筋も、
来年の春水頃迄には、仕上りの見込みが立ちまして御座居ます。

上妻　　うむ。

布田 私めも、返り見ますれば、

惣庄屋のお役目を仰せつけられましたから
かれこれ十七年になります。

上妻 うむ、そうか。そのようになるか。

布田 井手筋は、道床(みちどころ)と異り水の通る道故、

出費方も一通りでは御座居ません。

これが叶いましたのも、

一重に上妻様のお計らいが有りましたればこそで御座居ます。

上妻 うむ。

布田 矢部の手永は、上妻様とくと御承知の通り、

夫役を外に出せぬ程に農地の乏しき故、

所柄によりては零落の病根が、

どうしても断つことが出来ぬまままでございました。

されど三ヶ村等は、井手が通りましてからは、

末業より農に立ち戻る物も多く、

百姓小前も先のある生計と喜んでおります。

これも皆一重に上妻様の……。

上妻 保之助！

布田 はい。

上妻 どうも儂を誉めそやすが、何か言いたい事があるな。

布田 ……。

上妻 分っておる保之助。

残っているのは南手に水を引く事だと云いたいのであろう。

布田 はい、有難う御座居ます。お察しの通りで御座居ます。

お蔭を持ちまして、南手を除く、手永内の村々は、

ただ今普請中の福良井手が成就いたしますれば、

ほぼ井手が整う見透しとなりました。

仰せの通り、残るのは南手に水を引く事に御座居ます。

幸い福良井手で長い井手堀の傾きの仕法を学ぶ事が出来ました。その上、村人達の志気も上っております。

この勢のままに、南手の御普請に継げることが出来ますならばと存じてのお願いに御座居ます。

上妻

うむ、儂もお主がそれを何時云い出すのかと思つてはいた。で、石橋の仕法の目途は多方ついておるのか。

布田

はい、おおよそは…。

橋の石垣の高さが、十間余りになります故。

石工たちは、遠方まで出向き、見合いを深めております。

砥用の橋の時も、それが気掛りのよう御座居ました。

人馬の通る橋なれば、多少の揺れも障りにはなりませんぬが、

樋掛けとなれば、水漏れの元にもなります故、

何ぞ抜きん出た工夫を勘考致しているよう御座居ます。

上妻

うむ、左様か。したが、吹上樋は如何いたした。

布田

はい、それで御座居ますが、

まず廻江まわのえの吹上げを見て参りました。

落込み九尺、吹上げ六尺の

板の樋を使っておりました。

あれで田地を三百町養っております。

その他、未だ出向いてはおりませぬが、

日向の国の牧野村という処では、

長さ二十六間あると聞いております。

上妻

何でも薩摩まで出向いたと聞いたが真実か。

布田

はい、あの辺りは、竹を抜いて、吹上を作り、

呑み水を引いている所は、まま御座居ますが、

高さ七間に及ぶ水勢の多い例は御座居ませんでした。

上妻

うむ、それで、保之助の仕法は如何なものだ。

布田

されば、

この秋口に轟の滝上に試みの吹上げを組み立てます。

南手に必要な水の量を考えまして、
樋の厚さを一寸五分、三尺越しに木枠で堅め、
まず落口九尺九寸、吹上げ九尺に積っております。

上妻

うむ、相分った。その折は儂も、見分させて貰うぞ。

で、話は前に戻すが だ。

今年は拙い。お主も知っての通り、今年の雨は常ではない。
鯨手永は今年はかなりやられている。

四百町は下らない。

山鹿、菊池、玉名も一通りではない。

特に山鹿は山崩れが多く、

田畑の荒れは手が着けられぬのだ。

去年は、風、虫、水と三拍子で

四十万石近い損毛であった。

それ故、今年も拙い。

幸い真野様が、六月より御奉行に就かれた。

しかし、今年は何かと御多忙であろう。

来年にせい。来年、正月明けの二月、
早々に南手御普請の願いを出すがい。
福良井手もその頃は目算が着いていよう。

布田 相分かりましてございます。

それでは明年の二月、
早々にお願いをとお出し致しまする。
何卒よろしくお願ひ申し上げます。

上妻様・・・。

上妻 如何致した、改まって。

布田 上妻様には、飽田に御転任のお召しがあると小耳に入りましたが、
眞実で御座いますか。

上妻 ほう、保之助は早耳だの。

布田 もし、そのお話が眞実ならば、なりますことならば、
この新井手の御普請、御許し戴き、

無事成就いたしますまで、お力添え戴きとうございます。
先般も申し上げました通り

この手永において、田畑に水を引くお仕事は、
すべて、上妻様と御一緒に戴きました。

この吹上新井手の御普請は、

保之助、生涯の仕上げの仕事と心得まして御座居ます。
常々、申し上げております通り、

南手在の村人の乏しき生計を目のあたりに致し、
又、村庄屋達からの度々の訴えの折には、

彼も吾と同じ人なるにと思えば、

寝喰(しんしょく)を安んずることが出来ませぬ。

上妻様が仰せになる

水と田と人を結ぶ最後の仕事でございませぬ。
なりました事ならば、

この御普請、無事成就いたしましたして、

あの南手の村々の、緑の苗を潤す水の流れを、

御一緒に眺めとう御座居ます。

—上妻、手で臉を押える。—

上妻 分った、分った。相分った。保之助、儂を泣かせるな。

しかしこれは、儂の一存でどうなるものではない。

儂もお主と、この御普請を成就させたい心は一つだ。

よし、明日にでも、お奉行にお会いして、

この御普請を見届けることが出来るよう、お願いしてみよう。

布田 有難う御座居ます。何卒善き御返事が戴けますよう、

お待ち致しております。

上妻 保之助は善き惣庄屋殿だの。

布田 とんでもございませぬ。

上妻様こそ、御立派な御郡代様でございます。

上妻 こやつ。

―笑う、布田も笑顔を見せて―

― 暗 転 ― 第三場 了

―ナレーション― (第三場と第四場の間)

子供(∞) それから間もなく、五老ヶ滝の川上に、

何やら、大層な仕掛けを造っていると評判になりました。

それはあの鼻川に大きな橋を架けて、

その上に、水を通すという事で、

その水樋のお試しをする仕掛けだと聞きました。

縄や幕を張り巡らして、近寄ることは出来ませんでした、

其の内、何時の間にやら取払われていました。

何でも、うまくいきなさらなかったとかで・・・。

子供(9) 四月(よつき)程も経ちましたでしょうか。

笹原村のこむかりせという、深い澤の中に、

同じような樋の仕掛けが出来ているという噂が立ちました。

木々に覆われているので、覗くことも出来ないのですが、

ときどきその澤の底からドドドドンという、まるで太鼓を

打つような音が聞えてくるとか…。

第四場

「吹上樋、試験成功半月前のこむかりせ。

なんとか水勢は止めたの場」

嘉永五年二月二十五日

場所 笹原川こむかりせの仮小屋

キャスト

惣庄屋 布田保之助

惣豁(そうかつ) 石原平次郎

大工棟梁 茂助

石工頭 卯一

―中央に炭が熾(おこ)してある。

石原、大工、石工、小屋に入って来る。

石原、炭を足しながら―

石原 御苦労だった。よかった。

これでなんとか、水の勢を止める仕法の目算がついた。
いや、よかった。

―石工たち、現場の道具を片付けながら―

茂助 ほんとうによろしう御座居ました。

……昨年の十月、轟滝上のお試しの時は、
たった一間半あまりの

落込(おとしこ)みなのに、一寸五分もある樋板が割れ、
木杵がバラバラになったときは、

水神様のお怒りかと思いましたヨ。

石原 いや本当だ。私もあの時は、もうこの御普請は到底取畳まね

ば仕方がないと思った。

水樋を石で造るなどとは思いつく術も無かったのでな。

茂助 布田様がこのこむかりせをお選びになって

御一緒いたしました時は、

まるで隠れ家に来たような気がしたものです。
しかし、厚み四寸の石樋でも目割れするとは思いませんでした。
水の勢いと言うものはすぎましいものでございますな。

石工

親方様も、まさか水の樋にこれほど難儀をなさるとは
思いの外で御座いましたでしょう。

あつしに、「卯一、石と木を接なぐことが出来るか」と
お聞きになられたときには

とてもそんなことは出来ねえってお答えしましたが・・・
ただの流れ水ならともかく、

あんな勢のかかる水をとめる継目なんてありやしねえ、
それに此処の樋のでかさはどうだ。

七間の高さから

三十間の樋に落ち込んでくる水の音は、

大太鼓どころじゃねえ、雷様だ。

あの水を受止める

吹上げの昇口を何とかしろと云われた時にや、

恐ろしくて体が金縛りになったのを覚えております。

石原

無理もないことだ。

昇り上がる手前の十三、四間は四角い円く見えるように腹が脹らんで恐ろしくて近くに行けない有様であったな。

—大工に向って—

石工

しかし、親方様のお心の堅さにはほとほと感心したぞ。

これ程の失敗が重なっても、腕組みをして、じっと考え込むお姿を見ていると

不思議にあっしらも心が落着いてくる。

四寸もの石が割れた翌朝、

あっしがいつもより早くここへ来ると、

もう親方様がおいでになっいて、切り出してある石を厚さ一尺に刳(く)り抜く墨書を宗十郎と作っておられた。

次の日には、

鍛冶の伊助が鞆(ふいご)をいくつも持ち込んでいて、何に使うのかと聴いたら、

何でも石の継ぎ目に鉄を溶かして流し込むって話だった。

石原

あの方は、石や木の細工を専らにしておられるのではない。

しかし、そのときそのときの場合に応じて、

次の見通しを立てていく力は、

人とは思えぬ程、強く早い。

それに、目当の為には、挫けず、目を逸さず

日に夜を継いでお励みなさる。

いつもお側にいて、見習わねばならぬと感じ入るのだが、

仲々……。

石工

まことでございます。

その甲斐あって、此度据え込んだ水の昇り口手前三間程は、

一尺の厚みといたしました。

今のところ漏れも少なく崩れる気配がありません。

この仕様で進めばあと半月、三月の月半ばには、

見込みがたつかも知れませぬな。

一山昇ったようでございます。

—肩を叩きながら—

石工

なにせ、石の重さより、肩の荷の重さがこたえました。ところが、
ところで親方様は先程から見かけなかったが、珍しいことだな。

石原

布田様は、漆喰小屋に行かれた。

石の樋になれば、並みの漆喰では継ぎ目の漏水は止められぬ。
今お試しに掛かっているのは

八斗(はつと)漆喰の仕様とやらで、

左官たちと正月過ぎに焼いた石灰と白灰が、
五十日で程合いになると云っておられたが。

―戸が開いて保之助入って来る。

三人驚いて立ち迎える。―

布田

あ、そのままでもいい。寒いので、わしにも座をくれぬか。

石原

さき、こちらにどうぞ。

―炭を火に継ぎ足しながら―

石原

今日は、水の勢が止まりました、よろしう御座居ましたな。

布田

うむ、儂も安堵した。やはり石の吟味が何より肝心じゃの。

石原の眼はたしかじゃ。しかし張りを一尺にせねば

水の吹上げを持ちこたえぬとはのう・・・。

いや、お主達も御苦勞だった。ようやってくれたな。

二人

有難う御座居ます。

一山昇ったようだと今、話をしていたところで御座居ます。

石原

漆喰の塩梅は如何でございました。

布田

うむ、やはりあの左官の云う通りではないかと思う。

早速、明日搗き合わせてみよう。

松葉汁は、四月取りとなればまだ早いから、

昨年夏に採り置いたものを左官が持っておると云うていた。

とりあえずそれを用いよう。

継ぎ目の鉄では苦勞をしたが、

あれは取替えが難儀だからまだ使えそうもない。

それに、八斗漆喰の研究はまだ入口じゃ。

極めねばならぬ事が多い。

さ、もう帰るがよい。

明日も又早くから苦勞を掛けねばならぬ。

大工、石工 有難う御座居ます。

それでは、お先に御無礼いたします。

—二人帰って行く—

石原 惣庄屋様、どうぞ御引取ください。

私は、火の始末をしてから戻ります。

布田 うむ、儂も戻るとするか、では後を頼むぞ。

—帰り掛けて—

布田 石原、

明日よりは、儂は奉願覚えのお伺いに赴かなければならぬ。

留守の間、段取、取締など頼みおくぞ。

石原　かしこまりました。

―布田、帰って行く石原、火の始末にかかる。―

―暗転―

第四場
了

―ナレーション―（第四場と第五場の間）

子供(10) 御普請のお願いをお出しする二月が参りました。

布田様は、南手の村々にとって、

この御普請がどんなに大切なものであるかということをも、
一生懸命お認(したた)めになりました。

子供(11) この御普請には、藩のお金も拝借しなければなりません。

大変なお金が要るようです。

お米が沢山穫(と)れる上田(じょうでん)を四十二町、四年を掛けて開き、
そのお米で、借りたお金を返す計画も立て
そのお願いを藩にお出しになりました。

高橋 四月早々、藩から十二の御質問がございました。

先ず一つ目は、三尺四方の石樋(いしとい)を三筋も据えて、
其の重みで石橋が落ちないか。

落ちないにしても、地震に耐えられるか。

また樋の継ぎ目を損なわないか。とのご質問でございます。

そのお答えはかようでございます。

確かに石の樋と水とでは、

橋に余計な重しを掛けることにはなりますが、

砥用の橋の敷石と重さを比べても、

此方(こちら)のほうが三割ほど軽いし、

同じ三尺の輪石(わいし)に対し、

向こうは径が十五間、此方は十二間で、

やはり三割ほど強い。その上、石自体の質も良いので、

橋が崩れ落ちる心配は全くございません。

地震につきましては、これまでに多くの目鑑橋が造られ、

そのうちには年月(としつき)を経たものもあるが、

崩れた例は無いのでこれも心配はなく、

また、並外れた荷重を輪石に掛けたなら別ですが、

先程述べたように砥用の橋よりは軽いことになっているので、

普通の目鑑橋と同様です。

継ぎ手のことですが、

石垣の構造上、地震などで沈む心配は無く、

たとえ沈んでも二、三寸で、継ぎ手の漆喰の穴は予備があるので、

四人でかかれれば一日で済むので

たとえ二十箇所やられても八十人で修復できます。

継ぎ手の間が空きすぎたときなどの場合も、

長短の予備が沢山おいてあるので、簡単に交換できます。

通水中に万が一、続けて二度の地震にあったときでも、

古い漆喰を除く作業も入れて、

一継四人掛かりで二日で修復できるから、

田が干されてしまうことはありません。

二つ目は、予算が大きいので見積もり違いは無いか。

不足分が出ても藩は出せない。

三つ目は、井手が一万六千間もあるが、

上畝(じょうせ)が出来る利の良い井手筋は、村の出夫で賄えるか。

四つ目は、四十二町の田を開くと言うが、徳米の上納が見合うように

五つ目は工事が完成してから、万一、水不足や上畝開きが

予定どうりいかな場合、約束の返済が出来ないときはどうするか。

六つ目は、現状の村の田、これから開く田、

またそれは壺竈(ひとかまど)当たりどれだけになるか。

七つ目は、村出夫は、どのような仕事に割り当てられているのか。

八つ目は、新しい井手に引く水と、前よりある古田（こた）との水の分配について心配が起らないか。

九つ目は、将来土地の地味（ちみ）が良くなった時には、徳米の上納を増やすことが出来るか。

十番目は、井手に使った面積の、田畑の償い米はどうするのか。

十一番目は、井手が出来た後の、管理や修復の費用はどうするつもりか。

十二番目は、空き地や山などを田にしたとき、

竹や木、それに家畜用などの草地に困るようなことは無いか。

以上の十二のお問い合わせでございます。

その一つ一つに確かなご返答をお出しいたしたのですが、

普請許可のお達しは、仲々戴けなかったようで御座居ました。

六月、七月、八月も過ぎ、秋も半ばの九月に入ります。

第二幕

第五場（夏早、秋風、雨、水害）

「板樋に替えれば許可が出るぞの場」

嘉永五年九月七日

場所 布田宅

キャスト

惣庄屋 布田保之助

手附横目 石坂禎之助

修築中惣豁 佐野一郎右衛門

保之助の妻 益

郡代 上妻半右衛門

―保之助宅の座敷

佐野一郎右衛門が座って広げた書類に目を通してゐる。

座布団が二つ、床の間側と、舞台奥。

益、茶菓を運んでくる。―

益 お待たせ致しますね、佐野様。

旦那様は今、着替を致しております。

まもなく参りますので…。

どうぞ、冷えた茶でございます。

釣瓶(つるべ)に下げておいたのですよ。

まだ昼間はお暑うございますね。

佐野 雨が降りませぬな。

この様な年は、秋の長雨が心配です。

益 ほんに、先日、小原の庄屋様もそんなにお云いでした。

ごらん下さいな。茄子まで元気がないのですよ。

佐野　ほう、秋茄子ですな。

奥様がお手を掛けていらっしやるのですか。

―保之助入って来ながら―

布田　益は何もしない。ただ食らうだけじゃ。

―益、笑いながら―

益　まっ、そんなこと。もう漬物を出してさしあげませぬから。

―玄関から禎之助の声がする。―

石坂の声　御免下さりませ。

益　ハイ、ただ今。

―益、出迎かえに去る。―

益の声　いらっしやいませ。佐野様、お待ちかねでございます。

―石坂、登場―

石坂 遅くなりました。杣方(そまかた)で山の事故がありまして、井樋(いび)方まで駆り出されたらしく、誰も集まらないのですよ。
結局、御談議は延べとなりました。

布田 御苦勞でしたな。私も先程戻ったばかりです。
では、早速、始めましょうか。
―石坂、佐野、座に着く。益、茶を持ち、石坂に渡す。

― 石坂、どうもと云って受け取り、美味そうに飲む。
益、飲み終るのを待って湯呑を受取り退場。―

布田 石坂殿、如何でしたか。御郡方の御様子は。

石坂 はい。詰まる処を申しますと、
仲々に六ヶ敷(むつかし)いようで御座居ます。
四月に御座いました十二条の御問合わせの内、

ご審議で通らなかつたのが、

やはり、石樋が重過ぎはしないかという事と、

それに村の夫役で御座居ました。

郡代様も、種々御説諭に及ばれたのですが、

石樋につきましても論拠が乏しいとの御結論だと聞きました。

ありていに申しますと、そんな重いものは危いということです。

布田

やはりそうですか。

先般、御郡代初め御郡方、私共連立ち、

砥用橋を見分して来ましたが、

御郡方の思惑は、惣体はその辺りにあるようでした。

卯一も、輪石の基本について種々お答えはしていましたが、

どうもあの方達の胸に治る様子ではなかつたようです。

石坂

なにしろ、藩のおおかたは、

このご普請の見通しに疑いを持っている様子です。

このままでは許可が下りるとは到底思えない状況です。

しばらく、時を措いては如何なものでしょう。

佐野

これは、石坂様のお言葉とも思えませぬ。

二か条のご下問には、私ども始め、庄屋どのたちがあれほど論議を重ねてお答えに及んだではありませぬか。

石坂

それは分かっておる。が、漆喰で繋いだ石の樋を石の橋の上に通すこと自体が、藩から見れば無理があるのだ。

佐野

その件につきましては、重々心配は無いと特に申し添えて御座いました。石坂様もよくご存知のはずです。

石坂

重々心配が無いと申す事と、心配が無いこととは違う。

佐野

それは如何なることでございますか。聞き捨てなりませぬ。

石坂

元より聞き捨てできるようなことではない。藩の中にも目利きは居る。橋の仕法にしてもあれだけの重さを支えきれぬ橋脚ではないと言っているものも居った。

佐野

そのようなことを。

あれほど理を尽くしたお答えをしても分からないとは一体どのように言えばよいというのですか。

石坂

それに、石樋のつなぎも、長い時に耐えるとは言いい切れぬ。今のところでは、たれも請合える状況ではなからう。

佐野

それは至極当たり前のことでございましょう。

それなればこそあのように研究しているのではないのですか。石坂様は一体、このご普請に反対なのですか。

石坂

お主こそ聞き捨てならぬことを口にするな。

このご普請はこれまでのご普請とは異なる。

橋が掛かって、水が通らぬならば失敗では済まぬのだぞ。

佐野

言われるまでも御座いません。分かっています。

石坂

分かっては居らぬ。

手永というても広い。人の心もさまざまだ。

五老ヶ滝の試みが失敗に終わったとき、手永中が皆無念と思つたのではないぞ。口さがない者どもも居るのだ。

佐野

それはどうゆう事ですか。

石坂

出来るかどうか分からないご普請に夫役に駆り出されるのはごめんだと言う声もある。

佐野

なんと言ふことを。怪しからぬ。

このご普請を人事のように思うなどとそのようなものはきつくお咎めください。

石坂

咎めれば、口に出さなくなるだけだ。

要は万が一にも失敗は無きよう

手立てを整えることが肝要だと言っているのだ。

佐野

それはそうかも知れませぬが、

私には、どうしても納得できませぬ。

惣庄屋様はどう思われますか。

布田 うむ……石坂殿。

石坂 はい。

布田 先日石坂殿は、轟川より見上げたあの岸上を、
如何様にご覧になりましたか。

石坂 左様でございますな。

兩岸の上は余りにも高く、その間は遠く思えました。

布田 今、私たちは、その天空に橋をかけ渡そうとしているのです。

佐野 そうですよ。このようなことは、

何人も思いもかけなかったことで御座居ますよ。

布田 今、石坂殿が言われたことは、まことにもっともなことですが、
されど、もっともなことだけを重ねても、

思いもかけぬような橋は掛かりませぬ。

石坂　と申されますと。

布田　この橋は、何よりも先ず、

手永中の心が一つにならねば架かりませぬ。

確かに今、村人のところはさまざまで御座居ましよう。

石坂殿が言われたように、咎めても人は変わることは無い。
こころには心をもって諭すことです。

佐野　こころには、心をもってですか。

布田　そうだ。もしこのご普請のお許しを戴いた時。

この普請の丁場で働く大勢の職人や村人たちが

誇りをもって日々仕事が出来るように

支え励ましてくれと諭し頼むことじゃ。

石坂　支え励ますようにと……。

―石坂、深くうなずく。―

布田 同じ矢部の手永に暮らしていながら、

水に苦しむ南手の村人がいる。

その村々に、手永中がところを一つにして

橋をかけ、水を送ることが出来たならば、

己が石工や、大工でなく。また丁場で働きはしなくとも

こころを合わせたという事だけで生涯の誇りとなりましょう。

そう思いませぬか。

事の手立ての成るならぬは、その後のことと思いますが。

石坂 分かりました。手永中のところに橋が掛ければ、

必ずや郡方へも橋が掛かりましょう。

ただいまより、私も心新たにしてお勤めをさせて頂きます。

佐野 さすが石坂様ですね。先程の失礼をどうかお許しく下さい。

石坂 擲掬うでないぞ佐野。私も声をあげて済まなかった。

—玄関で益と客の声—

益の声 どうぞ、お通り下さいませ。

佐野様と石坂様がお見えで御座居ます。

—「通るぞ」と上妻の声。

三人、玄関の方を見る。

上妻大股で入って来る。—

布田 これは郡代様、お知らせも無くおいでなさいまして、
ささ、どうぞこちらへ。

—保之助、自分の座を空ける。

益、座布団を持ち保之助の座に敷き替えて退場。—

上妻 うむ、まだまだ暑い。一寸上を脱(と)らせて貰うぞ。

何、今日は忍びで来た。

知らせればお主たちの手間を取らせると思ってたな。

―羽織を脱ぎ、扇子を使う。―

上妻

これは又、会所の頭が揃って、何事を企んでおる。

―三人、座布団を外し、上妻に頭を下げる。―

石坂

人聞きの悪い事を仰せられます。

企んではおりませぬ、困っております。

上妻

ほう、何を困っている。

布田

先日は、砥用橋の御見分、お役目御苦勞様で御座居ました。

上妻

うむ、布田殿こそ忙しい折から御足勞であった。

で、何を困っておるのかな。樋のことか。

布田

いえ、樋だけの問題では御座居ませぬが……。

今石坂殿から伺ったところでしたが、

御郡方では、やはり石樋の重さが、差しさわりでございませうか。

上妻　うむ、そのとおりなのだ。

――しばしの間――

上妻　布田殿。

布田　はい。

上妻　布田殿。樋を松板にせぬか。

布田　は？　いえ、とても松板では持ちこたえませぬ。
それは上妻様もご存知のはずでは。

――佐野、石坂も驚く。――

上妻　布田殿、南手に水を移したいのであろう。

布田　はい、申す迄も御座居ませぬ。

上妻

ならば、困る事も、迷う事もない。

このお願いが通らぬならば、水も通るまいぞ。

樋は板に仕替るがよい。

なに、上が軽ければ、あれ達も異論はないのだ。

橋も出来るだけ堅固にせい。

橋が仕上る迄はまだ間がある。

目鑑が堅固ならば又、石の樋にも替えられる。

もう、これ以上、事を遅らせては拙い。

今月の内に御普請願いに積帳をそえて、

十月早々に差し出せるようにするがよい。

銭の事は後の事。儂が何とでも責は負う。

ただ、積り前の金は上げてはならぬぞ、

又、兎や角(とやかく)唱える輩が出て来る。

とにかく、力を盡して水を南手の山に移すのだ。

よいな。

今年も又日照り、水を措(お)いて南手の干田を潤す事は出来ぬ。

石坂も佐野も布田殿を良く支えてくれ。頼んだぞ。

— 三人、低頭 —

—
暗
転
—

第五場
了

―ナレーション― (第五場と六場の間)

子供(12)　そして、嘉永五年十月、橋の輪石を十五間に広げ、

石の樋を松板の樋に替え、

その他事詳(こま)かに検討された積帳を添えて、
再びご普請の御願いが差出されました。

御郡代様の仰せの通りでございました。

十一月十六日、僅か一月たらずの内に、

御郡方からのお許しが出たので御座居ます。

第六場

「御普請の許可が出たぞの場」

嘉永五年十一月十六日

場所 矢部手永会所

キヤスト

会所手代 高橋文治

会所添口(そえぐち)(添手代) 工藤宗次郎

会所下代(げだい) 佐野一郎右衛門

―南手新井手の、普請許可が出た手永会所内。

活気があり人の動きが多い。

事務用の文机、書類棚など。

高橋文治と工藤宗次郎が、庄屋達への通達文書を作成中。

佐野が入って

佐野 御普請御免のお達(たっし)が下りたとお聴き致しました。

真実(まこと)で御座居ますか。

高橋 おう、佐野か。待っていたぞ。真実だ。

四(よ)つの早飛脚で届いた。

佐野 宜しう御座居ましたな。

惣庄屋様はお喜び致されたでしょう。

工藤 お喜び位ではなかった。すぐに庄屋たちに知らせろと言われ、

早速、郡方にお礼に行かねばと云われて、

今しがたお出掛けの用意をされにお戻りになりました。

明日の早立ちでしょう。

いや、その足どりの軽いことといったら。

高橋 添口殿、口が滑り始めたぞ。

工藤 いやこれは、私も、気持ちちが明るくなりましたので、つい。

高橋 下代殿、早速だが手伝うて下され、

福良井手の要領でお願いします。

佐野 分りました。お達しの清書ですね。

庄屋殿たちもどんなに喜ぶことでしょう。

工藤 では一応お目を通して下さい。

私が一通り読み上げます。

初めは、お受書が必要な庄屋殿への分です。

ええと、長野村庄屋、志賀準平殿。

次に、畑村庄屋、甲斐源五右衛門殿。

新藤村庄屋、岩崎清藏殿。

小原(こわら)、田吉村庄屋、平右衛門殿。

ええ、白石、犬飼庄屋、宗兵衛殿。

それから、これは承知としてですが、

桐原村庄屋、下田藤十郎殿と

轟(とどろ)村庄屋、伝之助殿です。

次は、お達し文のみの庄屋殿です。本文を読み上げます。

其元儀、今度笹原川より南手立御普請おせつけられ候につき、

各懸中、御普請中、御用懸申付候条、

佐様相心得らるべく候

已上(いじょう) 布田保之助

これは、十一月二十日付でお願いします。

入佐村庄屋の美濃部勝左衛門殿と、

笹原村庄屋の美濃部孫次郎殿には、

別にお達しを書いて下さい。

本文も日附も同じです。

次は、津留村庄屋、藤九郎殿。

目丸庄屋、順藏殿。

菅(すげ)庄屋、利三郎殿。戻って来て、

桐原村庄屋、下田藤十郎殿。

終りが下市(しもいち)庄屋、新七殿。

これで庄屋殿へのお達しは都合十六通です。

桐原の下田殿は、受書分と重なっています。抜けてはいませんか。

佐野 大丈夫です。それにしても、日がありませんね。

もう半月で師走だし、年内に入札をするのでしょうか。

高橋 うむ、遅くとも来月の十日前後にはあるだろう。

佐野 受持ちも年内には決まるのでしょうか。

高橋 細部の詰めは、年明けだろう。

主な受持は内示が添えてある。教えようか。

佐野 私も入ってますか。

高橋 当然だ。

—書付を取出す。—

高橋 私と添口殿は御普請根受(ねうけ)で御入目銭受込みだ。

佐野は修築中惣豁だぞ。

工藤 それは、下代殿は大変な仕事を仰せつけられましたな。

佐野 私が修築中惣豁ですか。それは荷が勝ち過ぎですよ。

他に、どなたかおられませんか。

高橋 お主の他に誰が居る。考えてもみる、

こんなにより甲斐のある仕事は

生涯に二度とあるものではないぞ。

南手の山に水を移すなどという事は、

矢部手永にとつては、

奇跡と言つても言い過ぎではない夢の又夢であった。

惣庄屋殿がこの計画を出された時は、

御戯れかと思つたほどだ。

——佐野、遠くを見るように——

佐野 あれは、私が測量方見習の頃で御座居ました。

あれからちようど十年になります。

南手の見廻りをしていたので。

惣庄屋様と、赤星殿と、私めと……

あの夏もひどい旱魃でした。

私が岩尾城のお櫓台から引かないと南手は潤いませんと、

軽口を叩いたことが思い出されます。

子供達が香水を運んでいました。

干割(ひわ)れの進むわずかな田と、

重い水桶をあたり前のように運んでゆく

無邪気な子供達の後姿を見送りながら、
惣庄屋様は…。

私に、「岩尾の城の櫓と云うたの」と云われた。
今思えば惣庄屋様は、十年前のあの時から、
城山から南手に架ける水の橋の夢を
見続けておられたのでしよう。

工藤 夢から現実に引戻して申譯ないが、
私としましては、
御入目銭のお手当てが心配ですね。

―机中から一綴を取出す。―

これを見て下さい。

この二月の奉願書の御入目銭が
三百二十七貫ですよ。

この三百二十七貫は変わらないのに、目鑑橋の大きさが
十二間から十五間になっている。
これは大変なことです。

樋が石から板になって安くなったと云っても

六貫目ちよつとですよ。

これだけ大きさが違えば

一割や二割の入増では収まらないと思うのですが。

高橋 そうだな。間部様の云われるには、

やはり橋の入増がかなりになるだろうとの事であった。

とり合えず、仕立講と、官錢より拝借で賄う他なからう。

郡方も橋の進み具合によっては、

金を出し渋ることは目に見えているし。

しかし、今は、普請を仕遂げることが第一だ。

惣庄屋殿のことだ、正月は返上になるぞ。

工藤 無論のことです。

ご普請に掛かれるのは何時頃になるのでしょうか。

佐野 木の下橋(したばし)に掛るのが来年の秋でしょう。

石の切出しを急いで、

水の出る前に根石を巻いておけば、仕事は出来ます。

下橋の木組を請け負う大工は腕の振りどころですね。

これだけの橋になると、輪石を乗せる木組を組む技量が

目鑑の生命を決めると石工頭が云っていました。

来春には、橋の姿が見えるように頑張らなければなりませんね。

—工藤、未来を見つめるように—

工藤 まことに御座ります。

これが出来たら、南手は変わりますね。

何かこう、熱くなります。

—三人、仕事について—

—暗転—

第六場 了

―ナレーション― (第六場と第七場の間)

子供(13) それからは、轟(とどろ)の川筋はまるで戦場でございました。

下名連石のお山からだそうでございますが、

見たこともないような大きな木材が切り出されて来ます。

川床の石を切出す為に、川の流れを変える堤が掘られました。

堅い、兩岸の岩が剝(けずら)られて、橋の足台が出来ていきます。

石が次々と切り出され、岸の高い場所まで運ばれて行きます。

子供(14) 四月、いつもの年より早く大雨が降り、

心配していた洪水になりました。

低い岸に積まれていた木材や、

石切場で切り出したばかりの大きな石が

割れたり、滝の下まで落ちたりしました。

下橋の木組みに取り掛かる秋が目の前に迫ります。

第七場

「板樋を石樋に替えろの場」

嘉永六年八月五日 夕方

場所 上妻宅の座敷と庭先

キャスト

郡代 上妻半右衛門

惣庄屋 布田保之助

上妻の妻

—保之助、座している。

座布団は脇に外してある。

上妻、手桶と柄杓を下げて庭の方より登場—

上妻 や、いつも待たせるの保之助。

—縁に腰を下ろす。—

布田 御郡代様には、いつもながら、

御壮健の御様子、何よりに存じまする。

上妻 うむ、保之助も元気な様子、何よりじゃ。

布田 此の度は、鶴首(かくしゅ)を巡らせておりました御入目御錢の
拝借の儀、お達し戴きまして誠に有難う御座居ました。

厚く御礼申上げまする。

上妻 挨拶はその位でよい。もそつと此方に来い。

——保之助、縁近くに来て座りなোস。上妻、扇子を使う。——

うむ、此度は、儂も骨が折れた。

この頃は何処も此処も干拓で小田と野津が競いおる。

儂の隣も砂川新地が始った。

もともと錢の無い折に取り合いじゃ。

ここの御普請の入増も郡方まで聞こえておる。

中には、矢部の金という字には屋根がございませぬな、
などと、揶揄(からか)う輩もおる。

布田 御苦勞を掛けて申訳御座居ませぬ。

この春に、御郡方の御出方の意向が思わしくないと
お聞き致しました折は、眠られぬ夜もありました。

上妻 さもあるう。あれには儂も随分とてこずったぞ。

布田 あの時は既に輪石は備えの分まで切出し終っていたしましたし、

三千間の上井手も半近く進んでおりました。

井手筋の村々は云うに及ばす、

手永中が競って石工の手助けや、

井手堀の加勢(かせい)に励んでいます。

砥用の井手の前例もあり、

もし、御取畳みになるような事がありますれば、

それまでの出費の損失のみならず、村々の志気は失せ、

手永の盛衰にも関る事で御座居ました。

誠に有難う御座居ました。

上妻 しかし、洪水が石を流したと聞いた時には、

流石の儂も案じたぞ。

布田 私もあの流れが、石切場まで来るとは、

思いの外で御座居ました。

滝下に落ちた石や割れた石、流れた木材の運搬等で
三貫程の損分ができました。

大方の石は城山の根方にかけてありましたが、
申譯ない事で御座居ました。

上妻 根石はどうであった。

布田 はい、やはり損壊がございました。

その教訓を踏え、根石を一廻り大きくしたよう
で御座います。それから且てより、改めて割出しを頼
み置きました。

鞘石垣の規矩合が決まりまして御座居ます。

上妻 お、佐様か、あれは誰が受持であったか。

布田 佐野一郎右衛門、石原平次郎、

それに石工卯一と大工惣十郎に御座居ます。

穴生方や八代の岩永を初め所々の切込石工に尋ねました

が、良い答はなく、詰まる処、

此方で究める他はなかった様ですが、

見事なもので御座居ます。

熊本のお城の御矢倉台の形に仕上がると存じます。

—上妻立って庭に出る。盆栽に水を遣りながら—

上妻 大そうな高さになるが、石垣の腹が出るような事はないか。

布田 はい、それも釣石(つりいし)の仕法を佐野達が決めました。
二十八ヶ所を予定しております。

上妻 どうやらかなりの入増になるの。

布田 はい、目鑑木橋でかれこれ二倍を超えるやも知れません。

上妻 なに、二倍を超えるか。金の手当は如何する積りだ。

会所の官銭はあるのか。

布田 さほどは御座居ません。この手当も大変でございます。

会所の官銭は徳米の立替、不時の災害や不作時の手当などに備えるためのもの故、この御普請ばかりには使えませぬ。会所からはとりあえず会計方より

三朱利息で百貫迄は拝借させて戴いて、御家人寸志、大宮司殿や四手永の講銀、それに庄屋役人達の加勢も願わねばなりません。

上妻 うむ、そうか。ならば、野尻、下田兩人と、

馬見原の八田にも頼みおけ。儂からも話しておく。いよいよの時は、永代(えいたい)扶持(ふち)上納という手もある。さすれば、下橋には何時掛る。

布田 はい、予定通り、

十月の前半には下橋の木組が始ります。

石の吟味や鞘石垣が思いの外手間が掛るものと存じますので、下橋の取除きは、春水過ぎて卯月に掛るやも知れませぬ。

上妻 うむ。四月になるか。

ところで、肝心の石樋の方は如何いたしておる。

布田 はい、それも漆喰と石との馴染みの仕法が

ほぼ定ってきました故、先ずは安堵いたしました。

とはいえ、漆喰の硬さがまだ石の硬さに及びません。

水が通りますには、更に三月が必要かと存じます。

上妻 そうか、ならば、早めに板樋を石樋に戻す

積替の願を出さねばなるまいな。

布田 はい。されど、石樋に戻すお許しがかなうでしょうか。

—上妻、柄杓を手桶に戻し、扇子を開け閉じし考えている。

庭から手まりが上妻の足元に転がってくる。

続いて童が追ってくる。—

童 お祖父様、鞠を止めてくだされ とめてくだされ。

—上妻鞠を受け、童に渡しながら膝に抱き上げる。

童二人駆けてきて抱かれています童を見、

立ち止まり手招きをする。—

童たち 千佳様おいで・・・。

—上妻、童の頭を撫ぜ、膝から下ろし、

童たちのほうに優しく押し遣る。

童たち手をつなぎ、去る。—

布田 ……。

上妻 よし、ならば師走にせい。

それも中半過ぎの気忙(きぜわ)し い時がよい。

御郡方も年明けまでお達しを延すことはせぬ。

それ迄に、確か白川よりお花畑のお屋敷に引き込んである

板樋に水漏れしている所があると聞いた。

早急に郡方と見分でもしてこようぞ。

さすれば板ではもたぬと考え直すであらう。

布田 そのようなところが御座いますか。それは妙案。

さすが上妻様で御座います。

上妻 おぬしはすぐ儂を煽てる。

儂の姓はきすがこうずまではない。唯の上妻じゃ。

よし、これで段取の山は七分方登った。

保之助、これからは、お主の仕事じゃ。

銭の苦労はあろうが、見事な目鑑が掛るのが楽しみだぞ。

布田 有難うございます。これで目の前が明るくなりました。

来春には、必ず橋掛までは仕遂げまする。

——妻女、茶を運んで来る。——

妻女 お話が弾みますね。でも、布田様は、いつも、お仕事の

お話ばかりのようで御座居ますね。

上妻 それはそうだ。布田殿から仕事を取り上げたら、

鍋の蓋にもならぬ。

妻女 御冗談が過ぎますよ。

旦那様も、少しお見習いになられたら如何ですか。

上妻 儂か、儂が仕事の話ばかりしていたら、

お前が逃げ出すであらうが。

妻女 そんな事は御座居ません。見直して差上げます。

布田 奥様、私も、他のお話は致しまする。

上妻 それ、見ろ。

妻女 左様で御座居ますか。それでは、布田様。

春先のお天気の良い日、川の辺を奥様とお散歩なされたら、
何のお話を致しますか？

布田 それは…、それは、梅雨になり、井手の崩れは出ないかと…。

妻女 ホホ、そら、ごらんなさい。やはりお仕事。

旦那様ならどうします。

上妻 儂か、儂なら、お前に、手をつなごうか、と云う。

妻女 布田様、これで御座居ますよ。お話にならないのです。

布田様は、今夜お泊りでしょう。

布田 はい、いつもの宿を。

妻女 —上妻に—

では、御酒(ごしゅ)をお出し致しませうか。

今朝、遠藤様に、あら蝦蛄(じゃく)を戴きました。

美味そうで御座居ますよ。

上妻 そうか、それはよい。保之助、今日はゆるりとせい。

布田 はあ、しかし明日が早いので、今日のところは、これで

上妻 よいではないか。内があのように申しておる。

帰れば、又戦いであろう。よし、酒を出せ。

これからの話もまだある。

布田 は。

——妻女、保之助の表情 を見て、笑いながら——
妻女 はい、それでは。

——暗 転 ——

第七場 了

―ナレーション―（第七場と第八場の間）

子供(15) 木組みの台橋(だいばし)が円を描くようになると、まるで縁をとるように綺麗に輪石が乗せられていきます。

その石や材木を上上げる道も又、木で組上げていくのです。大勢の大工や石工や村人がまるで蟻のように働いています。

子供(16) 台橋は数百本の丸太の林です。

木槌の音、石鑿(のみ)の音、鋸の音、

大声で交される指図。大きな石を引き上げるかくら巻の軋(きし)み。鞘(さや)石垣も日に日に積まれていきます。

子供(17) 秋の日差しが注ぐ台橋の上に、雨の石切場の中に、いつも布田様のお姿が見られました。

心魂を尽くしたそのお働き振りは、

普請場の志気を奮い立たせたただけでなく、

手永内の人々の尊敬を集め、

橋は高く高く立上っていきました。

第八場 (下橋取除きの日)

「水が来ますの場」

嘉永七年三月

場所 目鑑橋吹上口、御普請小屋の前

キャスト

惣庄屋 布田保之助

郡代 上妻半右衛門

修営惣豁 佐野一郎右衛門

手付横目 石坂禎之助

石工頭 卯一

台築(だいちく)番匠頭(ばんしょうがしら) 茂助

村人 多数

老婆 みの

その息子 儀助

―吹上口付近。上手後に普請小屋。

床几が五脚、中央寄りや、下手寄りに置いてある。

上手寄りに奥から手前右寄りに、斜めに縄が張ってある。縄を境に上手に村人が集まっている。

石坂、村人が縄を押すので、時折、制止に務める。

下手が目鑑橋。―

―下手より保之助、上妻半右衛門登場。

保之助右手に指揮棒を持っている。

佐野一郎右衛門、やや後れて卯一登場。―

―布田、石坂に向って―

布田 御苦労様です。

石坂 ご苦労様です。しかし、下橋取除きに、これ程人が寄るとは思いませんでした。

―村人、一人が頭を下げるとそれに習い

一斉に腰を屈め、頭を下げる。―

佐野 手永中が力を合わせた御普請です。

誰が広めたというのでなくても、

今日だけは見届けたいのでしよう。

橋の上から見ると、川上も川下も人だかりで、
皆、上を向いている。

まるで露の臺（ふきのとう）が咲いているようですよ。

上妻 いやいや。

儂（わし）もこれ程の橋の下橋を除くのを始めるのは始めてじゃ。

砥用の橋のときは、儂は未だ菊池であった。

しかし方三尺の石樋というものは頼りげに見えるものだな。

石共が、各々生き物のように組合うて居る。

布田 はい。お蔭を持ちまして、

石樋は三流無事に据置くことが出来ました。

もう一息でございしますが、

水は吹上げまでは参ります。

今、大工共を定所に着かせております。

間もなく合図になりますよう。

—卯一に—

佐野 丈八は下か。

卯一 はい。丈八は落込（おとしこ）みの下で控えております。

此方の下は甚平でございます。

番匠頭は未だ差配をしておるようです。

布田 では儂は仕舞をして参る。

郡代様、私は衣服を整えて参ります。

—保之助、普請小屋に入る。—

上妻 禎之助、下橋を外すときには、いかい音がするそうだな。

石坂 それが、私も聴いた事がないので御座居ます。

これだけの石が、一勢に折合をつけるのですから、
どんな音がするので御座居ましょう。

佐野 —卯一に—

頭、どのような音がするのだ。ガラガラという音か。

卯一 滅相も御座居ません。

それは石の崩れる音で御座居ませんか。

石の結び合う音は、

短く、鋭く、熱い音で御座居ます。

いや：音：では無いので、口ではうまく申上げられません。

御自分のお体でお確かめ下さい。

上妻 体で確かめろというのか、うむ、そうか分った。

——保之助、正装で小屋から出てくる。

皆その姿を見て、姿勢を正す。

上妻 「うむ」と頷く。村人、ざわめきを止める。——

布田 上妻様、では行って参ります。

上妻 行って参りますと？ お主は何処（いずこ）で検分するのだ。

布田 橋の合わせ目に要石(かなめいし)が御座居ます。

私は、そこで見届けます。

石坂 惣庄屋様には初めより、検分の場所を橋の上と定めて

おられましたのです。

佐野 私は、やはり此処から検分された方が良いと存じますが。

布田 何故かな、一郎右衛門。

佐野 いや、ただ万ヶ一のことがありますればと存じまして。

布田 万ヶ一のことなど有りよう筈はない。

僕は、卯一や丈八や茂助を信じている。

ましてや、そなた達を初め、この橋に心血を注いでくれた
幾千の仸人(はたらきびと)達の祈念があるではないか。

僕が今、この橋の要かなめに座するのは、

この橋が不首尾に終わることがあったときの

己(おのれ)の責(せめ)の故などではない。

この橋が、木組の力を借りず、己のみの力で、

己自身と、南手に運ぶ水の重さを背負って

まさに立ち上がるその際に、

衿を正して立ち合ねばならぬと思うからじゃ。

—保之助、郡代に一礼し、番匠頭とともに橋に向い下手に去る。

卯一、一礼して後を追う退場。

一同、下手に目を移し、息を呑む。—

—ややあつて—

番匠頭の声 下橋外し、始め!

—おうという声、引鋸の音、続いて木槌の音、

木の軋む音に続いて鋭い音が響き周囲に響する。

ややあつて、ワーツと橋の下から歓声が上る。

次第に波のようななどよめきに替る。

舞台の村人達も喜びを交している。—

上妻

うむ、見事、事無く眼鑑橋が掛ったようだな。

——木槌の音が聞えてくる。——

音が止むとややあって保之助、早足で戻って来る。——

布田

水が参ります。

——一同、吹上口を凝視する。

村人、縄が切れるように押し寄る。

やがて水の上る音、ザット吹き上り流れ出す音、

上妻「おお」と云って身を乗り出す。

石坂、佐野、感動の声をあげ、水の流れを見送る。

一人の農夫が老婆を背負って、縄の中に入ろうとする。

村人、止めようとするが、保之助、手で許しの動作をする。

農夫、井手際により、老婆を背から下すと、

井手際に寄り、しばらく水の流れを見つめるが、

屈んで一掬いの水を運び、老婆に差出す。

老婆、しばらく無言でその水を見つめてるが、やがて震える手で農夫の手と共に押戴き、農夫の顔を見上げて「水」と呟く。皆老婆を凝視する。

保之助老婆に近づき、膝を折り老婆の手の下に自分の手を添え、水を吞ませる。

老婆保之助を見上げ、じっと保之助を見つめるがやがて、驚愕と感動が体に溢れ、縋るように手を押し戴く。

村人地に手をつき口々に礼を言う。

未だ治まらぬ歓声とどよめきが耳して

— 暗 転 —

第八場 了

―ナレーション―（第八場と第九場の間）

子供(21) 南手の村に水が来ました。

笹原川の磧(せき)から六千四百四十間の井手を流れて、
轟川に懸る夢の石橋を渡って…。

南手の村々に水が希望を運びます。

子供(22) 小原(こわら)村、田吉村、長野村、犬飼村、

新藤、小ヶ蔵、白石、愛藤寺、水は村人の求めに従いながら
田を潤し水車を回し、南手の大地を下ります。

子供(23) 思えば十三年前、あの愛藤寺の道を、

水桶の重さに耐えながら、明るく呑水を運んだあの子供たちは今、
どんな運命を生きているのでしょうか。

子供(24) 下(した)井手の工事は、今が盛り、

一万間に及ぶ井手を作り終えて、

安政二年は暮れ行き、明ければ、安政三年のお正月です。

第九場

「通潤橋命名の場」

安政三年辰正月七日

場所 奉行真野源之助の屋敷

キヤスト

奉行 真野源之助

郡代 上妻半右衛門

惣庄屋 布田保之助

手付横目 石坂禎之助

真野の妻

―上妻、布田、石坂、床に向って正座している。―

―真野源之助登場―

―三人手をつき、低頭、真野床を背に座に着く。―

上妻 改めまして、御奉行様には、

明けまして、お目出度う御座居まする。

—三人、平伏辞儀をする。—

真野 新年(あらたま)の挨拶は、奉行所で済ませた。

もうよい。頭を上げよ。

三人 ははっ。

—頭を上げる。—

真野 宿で粥が出たか、保之助。

布田 は？いえ。

—真野、手を叩く。はい唯今と上手で声、ややあって、

真野の妻女登場。—

妻女 御用で御座居ますか。

真野 粥は未だあるか。

妻女 七種(ななくさ)でございますか、はい、
夕方お百姓さまも大勢見えられるので、
五助がたと摘んで来てくれました。
いつでも作って差上げられます。

真野 後ほど、この者達に振舞うてくれ。
宿では馳走せなんだそうな。

妻女 かしこまりました。

—妻女、退場—

真野 朝食の後、半刻程、駒を責めた。なに、門前でじゃ。
正月は酒が多い。体がなまってしまふ。
半右衛門は何をしておった。

上妻 は、ま、同じようなもので御座居ます。

真野 石坂は保之助と一緒に正月返上でなかったか。

石坂 はい。私は布田殿と下井手筋の田開(たびらき)の様子を

見廻りましたが、

高橋を初め、会所の銀方は南手の御普請の仮算用に
年の瀬迄追われておりました。

—真野、保之助に向って—

真野 上妻郡代の後を引き受けた横田も戸惑うておるのではないか。

なにせ半右衛門の跡では、後始末が大仕事であろうからの。

布田 いえ、横田様には、何事につけ、御目を掛けて戴いております。

真野 目を掛けているのではなく、どう致し方もないのであろう、
のう半右衛門。

上妻 いや、申訳御座居ません。

御奉行には一方ならぬご配慮を頂き、

まことに有難う御座いました。

私も矢部手永では良いお仕事に関らせて戴きました。

しかし、昨日のように思い起します。

あの八月晦の渡初(わたりぞめ)の朝、

御奉行が、見事と云われた時には、

私も、改めて橋の佇いを眺めました。

誠に見事な目鑑橋で御座居ました。

立派に仕事を仕上げた石工卯一や、

九十の齡(よわい)を超えた、新藤の新兵衛や、白石の円助の母親が、

曲がった背を懸命に伸しながら渡る姿を見て、
瞼が熱くなりました。

水の乏しい九十年の月日は短いものではない。

耐え難い苦勞の年月であったでありましょう。

その老いた背を見詰(みつめ)る

布田殿の眼に熱く光るものを見た時、

布田殿にとって、

村々の苦しみはそのまま我が苦しみであったのだなと

心底から思い入りました。

思えばまことによき日々で御座いました。

石坂　そうですね、南手は生れ変わりますよ。

私は今でも、吹上げの水を押し戴くように、

息子の手から呑んでいたあの母親の

手の震えが目に浮びます。

今まで井手筋のお仕事も、随分やらせて戴きましたが、

あのように水の有難さを知らされた情景には出合いませんでした。

布田殿は、矢部手永の神佛ですね。

真野　いや、保之助は、神でも仏でもない。

神ならば、恵みもすれば奪いもする。

幸いも齋(もたら)せば、災いも齋す。

この男は、南手に幸いや、恵みを与えこそすれ、

奪うことや災いを為したことはない。

父上市平次殿や叔父上太郎右衛門殿の志をこれ程正しく

受継いだ者を儂は且て知らぬ。

惣庄屋のお務めを預り、

矢部手永の民の安寧の為に励んだ年月は、

武士にも稀な人の鑑。

南手に掛けたあの目鑑橋の如く見事じゃ。

布田 とんでも御座居ませぬ。

惣庄屋として当り前のことを為しているだけのこと。

身に余るお言葉です。

振り返りますれば、

お奉行様に初めてお会い致しましたのは、時習館で御座居ました。

厳しいお教えで、間違いは少なき事でも

しかとお正しになられましたこと、

昨日のごとく思い起こされます。

上益城郡代様として、御教導戴きましたのは、

私が三十三の折でございました。

「民の苦しみがなければ政(まつりごと)は天の道にある」との

惣庄屋の心構え、ひと時も忘れぬよう、

常に肝に命じてまいりました。

真野

平右衛門もよく保之助を助けてくれた。

お主がなければ、あの橋も今日の保之助もなかったであろう。

郡代の立場を善く弁えながら、情厚き心配りと忖き、
委細は禎之助より聞き及んでいた。
厚く礼を云うぞ。

上妻 そのように、御奉行、困ります。

私はただ布田殿の上役であっただけ、
至極あたりまえのことでござる。

ああ、目に何か入った。

—目を頻りに拭う。—

石坂 お奉行、私にもお誉めの言葉を下さい。

—真野、笑って—

真野 禎之助は誰が誉める言葉よりも、

はるかに大切なことを

保之助から貰ったのではないか。

お主も、いつかは惣庄屋のお務めを戴くやも知れぬ。

その折は、人の上に立つ者の六ヶ敷きに、

否応なしに向き合わねばならぬ。

この御普請を通してお主が受取った数々の宝の種子、
しっかと育てて、その折に役立てるがよい。
南手の村々の田開きはこれからであるう。
せいぜい励むがよいぞ。

石坂 左様で御座居ました。

今のお言葉、禎之助、肝に命じてお受け致します。

真野 うむ、頼んだぞ。

—真野、床の間に置いてあった

文箱より一枚の書を取出す。—

真野 頼まれておった、目鑑橋の名を考えて置いた。
これでどうだ。

上妻 これは、有難う御座居ます。

布田どの、お受けいたせ。

布田 ははっ

—保之助、真野より書を受け、辞儀をして戻り
書を開き目を通す。—

布田 読み上げさせて頂いて宜しう御座居ますか。

真野 うむ。

布田 澤山下二在リテ、其ノ気上二通ズ、潤ヒ草木百物ニ及ボス。
通潤橋。…通潤橋。

有難う御座居ます。又とない良い名前をつけて戴きました。
早速石碑に刻ませて戴きます。

—上妻、石坂、書を廻し、領きながら読む。—

真野の妻女、侍女と共に粥の膳を運んで来る。—

妻女 ささ、粥が出来ました。

―膳を整え終わって―

これで今年も、無病息災 間違いなし、
今年も御健勝でお励みください。
旦那様も、召し上るでしょう。

真野 うむ、儂も貰おう。

―保之助、真野より書筒を受け取り、丁寧に納める。―

―上妻、保之助、石坂、各々

これは忝けない、うむ美味そうだ。

や、酒もあるぞ、これはお屠蘇です等と、
寛いだ雰囲気の中で―

―音楽―

第二幕 了

―ナレーション― (第九場と第十場の間)

女性 御奉行真野源之助様から、お名前を戴きました通潤橋。

その肩に背負った三筋の石の樋に、七年の年月が流れました。

お約束の四十町の田開きのおおかたを果たされた布田様は、

文久元年十月、ご子息弥門様に御惣庄屋をお譲りになり、

南手の下、緑川の岸边の津留と申しますところにお住まいを

移し、ご隠居なされたので御座います。

雪模様の大晦日、奥様は、お正月のお飾りをなさりながら、

早朝より会所にお出かけになられました布田様のお帰りを

お待ちいたします。

第三幕 エピローグ

文久元年大晦日

場所 津留の隠居宅

キャスト

嶋 一葦 (布田保之助)

妻女 益

会所役人 赤星右之助

音楽

― 部屋に火鉢

益、正月の華を活けている。

時々、聞き耳を立て、戸口の方を伺い、立って外を見る。

やがて、人の気配。戸口から保之助帰宅。

会所の役人を伴っている。

兩人、箕、笠を脱り、雪を払う。―

益 お帰りなさいませ。お疲れでございました。

先程からひとしきり雪が舞いましたので心配して居りましたが
。。。。

保之助 うむ。途中から風交じりになりおったので案じたが、

今は止んでおる。

右之助が供をしてくれたので助かった。

礼を言うてくれい。

益 それはそれは、赤星様。有難うございました。

どうぞお上がりになってくださいまし。

熱いお茶をお入れ致しましょう。

赤星 いえ、どうぞお構いなく。又雪が来ない内に戻ります。

堂の上でお見かけいたしました時は、

ちようど雪が強う御座いましたので。

まだ八つ過ぎというのに、道が暗く見えまして。

それではこれで失礼いたします。

どうぞ、良いお年をお迎えください。

益 左様で御座いますか。ではお引止めいたしません。

お足元御氣を付けてお戻りください。

赤星様も良いお正月をお迎えくださいませ。

保之助 世話になったの。心して帰るが良い。

明けて又会おうぞ。

——赤星、重ねて頭を下げ去る。

益、保之助の脇差を受け取り、

羽織を脱がせ、用意してあった綿入れを着せ、

行灯に火打ちを使って灯を点け、

書架と共に火鉢の脇に寄せる。

保之助、書を書架に乗せ、座る。

益、火鉢に掛けてあった鉄瓶を釜置に移し

炭を立て直す。

湯呑をとり、白湯を注ぎ、保之助に勧める。——

益 弥門は元気にしておりましたか。

保之助 元氣だ。惣庄屋というてもまだ二月足らずじゃ。

これからは企てることも、断ずることも執り行うことも全て己が責めを負う事になる。

益 弥門にそのようなお勤めが出来ますでしょうか。

保之助 うむ。弥門は儂とは氣質が違う。

あれはあれで又、何か新しい仕事を考えているようだ。何、案ずることはない。もう四十を超えているのだ。

益 左様でございますね。そう考えることに致しましょう。

— 益、羽織など周りの片付けをする。

保之助 書を広げ見入る。

益、火鉢を挟んで座り、しばしの沈黙。—

益 年が暮れますね……今日は瀬のながれも静かですこと。

保之助 うむ……

—保之助、書より目を離し炭火を見つめている。—

益 何をご思案なされておいでですか？

保之助 ……益には、長い苦勞を掛けたの。

益 そんなことをお考えですか……。

私はただ旦那さまを見上げながら

お添い申し上げてきましたから。

苦勞などとは思いませんでした。

……ただ……。

保之助 ただ、なんじゃ。

益 それは……、どう申し上げてよいやら……。

旦那様は今でも南手のお水のことをお考えでしょう。

保之助 それは、南手に限ったことではない。

このような山間の手永では

何よりも水の利が無くては小前の生計が立たぬ。

その思いは、片時も儂から離れたことは無い。

ただ南手は儂の最後のご奉公じゃによって、
今になって感慨もまた一つ深いものがある。

益 本当に大変なお仕事でございましたね。

今でもあのころの旦那様のお姿は眼に浮かびます。

この津留の地をお住まいになさいましたのも、

ここが南手の水の果てだからでございましたよ。

保之助 うむ。 それもあるが、

何時までも会所の世話焼きをしているわけには行かぬ。

それに、戻りが上りではしんどいのでな。はは・・。

益 ほんにきさようでございますね ホホ。

それに実家の兄が申しておりました。

保之助殿はあの目鑑橋を掛けたのも並大抵ではないが、

あのような入増しの用立てが出来た手腕も

並で出来るものではないと。

保之助 金は儂が用立てたのではない。

皆が心を寄せてくれたから出来たことじゃ。

あの折はそなたの兄弥左衛門殿や甥御の作左衛門殿にも
たいそうなお力添えを戴いた。

益 大したお役にも立てませんでしたものを、そのように……。

兄の申すのには、

このご時世に惣庄屋の仕事は広い。

布田殿の器量や人のつながりをもってすれば

大きな登用も望めたであらうにと、

そして、布田殿が手永の小前に掛けた想いは常人ではない。

何があのようにあの男を動かしているのが慮れぬと。

私も、今までそのようなことを考えたこともございませんでした。

私はただ旦那様が手永のお百姓の難儀をお救いするため

惣庄屋のお仕事をお励みなさっていらっしゃると

信じておりましたので。

私が、先程、「ただ」と申し上げたのはそのことでした。

保之助 益。

益 はい。

保之助 この日の本の国の石高(こくだか)はいかほどじゃ。

益 はい？

保之助 恐れ多くも徳川八百万石といい、

我が細川藩五十四万石という。

がそもそも一国一領の権勢を誇示する石(こく)とはなにか。

一石は一斗に支えられ

一斗は一升に一升は一合に支えられる。

さすれば一合は何によって支えられようぞ。

益 一合は……。

保之助 一合は分米(ぶまい)の粕一粒(いちりゆう)一粒によって支えられるのであろう。

益
.....

保之助 その米の一粒は・・。

益 お百姓の汗の一粒(つぶ)でございましょう。

保之助 その通りだ。

石(こく)の上に座するものは、権力のみではない。

御家人といい、商人といい、地主といえど、

位あるものは、畢竟その汗を見下(みお)ろすところにある。

惣庄屋とても同じこと。

じゃが儂はそれの是非を問うていのではない。

世の中の役回りと思えばそれはそれなりの道理も成り立とう。

益
.....

保之助 儂はあの子供たちに十年後の約定をしたのじゃ。

益 あの子達とは・・どこのお子でございます？

保之助 南手ご普請の御願いをお出したす十年程前になる。

愛藤寺の路傍で水桶を担っていた子らに会った。

赤星が、所よく生まれて居れば、

十年後はよき百姓になろうものをと申した。

奉公や身売りなどしなくても済むと話したのだ。

所よく生まれて居れば……。

あのとき僕は何か胸に落ちたような気がした。

生まれどころを選ぶことは誰にも出来ぬ。

あの子らは何故水もない村の小前の家に生まれたのであろう。

わしは何ゆえ惣庄屋の血縁けちんを授かったのであろう。

益、如何じゃ。

益 そのようなこと、私にはわかりませぬ。

前世からのご縁ではございませぬか。

保之助 うむ……。じゃが、今は、

僕もお前も、あの小前達もこの世に生きている。

苦しみも悲しみも、楽しみも喜びも

全てこの世の出来事のほかではない。

あの者たちも儂も、しんたいはつぷ身体髪膚

何一つ、変わらぬ備えを天より授かっておる。が・・・

生まれどころが異なるというだけで、

其の生涯は天と地の隔たりがあるではないか。

益

本当に・・・。川一つ隔てても岸の此方(こなた)は極楽、
かなたは地獄とも思えます。

保之助 其の幸せの隔たりを儂は何としても埋めねばならぬと思うた。

南手を囲む三筋の川も、あの子等の生まれも

神仏のなせることに違いない。

さすれば人は、人は何をなさねばならぬ。

惣庄屋の儂になしうること。

それはあの子等の住む岸に橋を掛け渡すこと、

橋を掛けて、水を移せば、

極楽の風をいささかなりとも送ることが出来る。

必ず 橋を 架ける。

それが、儂の命があの子供たちに誓った十年後の約束なのじゃ。

益 旦那様

保之助 神仏は故なくしてこの世に人を送ることはない。

人は皆、其のところ処において、

神仏よりの言付(ことづ)かりがある。

じゃが：

神仏の声は心の耳をとくと澄まさねば聞こえてはこぬ。

益 私にも、いえ私には聞こえますよ。

保之助 そうか、・・・聞こえるか。でなんと聞こえる？

益 はい、旦那様と睦まじゅう添い遂げて、

来世もご一緒しなさいとお言いつけがありました。

保之助 そうか。うむ、そうか

いやそれは重畳(ちようじよう)。はは・・・。

益 ・・・それから・・・。

保之助 ん？ まだあるのか。

益 はい。それから、弥門にお父上の志を継がせなさいと。

保之助 そうか……。

—保之助、煙管を使う

益、炭火が小さくなっていることに気がついて炭を継ぐ—。

益 さ、それではお蕎麦の支度をいたしましょうか。

—立ち上がり、台所に向かう。保之助、背越に—

保之助 苦勞を掛けた。

—益、立ち止まり、保之助に心をあずけ、

そのまま縁近くによる。—

益 また雪が降ってまいりました。

— 音楽 —

— 益と保之助、

舞うように降り始めた雪に視線を遣る。

雪が舞い続ける。

行灯のほのかな明かりの中に

二人の姿が何時の間にかにシルエットに変わる。 —

— 音楽アップ 白紗の幕が静に 静かに下りて —

— 布田保之助事跡のロールアップ

バックに笹原の堰より上井手、通潤橋、早苗の田に注ぐ水、

通潤橋名石碑 保之助、益の墓石、布田神社など

井手を流れる水、水のupに保之助銅像を重ねて —

静かに

幕

南手新井手記録によせて。

この劇の底本となっている〔南手新井手記録〕は、当時の庄屋であった渡辺家（宗兵衛）が所蔵していたもので、平成六年、矢部町立図書館に移管されたものである。

本書は、矢部町古文書研究会会長の甲斐保明氏が、平成13年11月1日に解説を完了されており、図書館協議会の委員長である田上彰氏から紹介された。

内容は、矢部手永南地域の零落村救済の念い窮って起こした嘉永五年子閏二月の奉願覚えに始まり、明治元年十月、南手井手下村々の庄屋より布田市右衛門（弥門）宛の徳米上納の措置についての嘆願書に終わる百五通の、奉願書（工事申請書）や、お達し（許可書）、覚え書き（メモ）などが主なものである。凡例付きで、ほぼ時系列に綴じてあり、通潤橋架橋、上下井手工事の推移を概観することが出来る。

内容についての詳細は別の機会に述べることにして、架橋までの工事の流れを追ってみると、

* 嘉永五年二月、南手の村々の窮状とこの普請の必要性を訴えた見積もり（あまり詳細とは言えないもの）付きの奉願書の提出。この時は石の樋で提出、目鑑輪石は十二間半円

* 同年四月、藩より十二ヶ条のご下問（かなり厳しいもの）と、その回答。

しかし、そのまま藩からの許可は九月になっても下りて来ない。

* 十月になって、石の樋を松板の樋に替えて、前回よりかなり詳細な見積もりを付けて再提出。目鑑輪石は十五間半円、橋脚は兩岸の岩盤に変更。

* 十一月十六日許可が下りる。但し、橋と吹上樋は、会所官銭で賄えとある。すぐに村庄屋たちに通達。

* 嘉永六年二月、工事費用、三百二十一貫余 出方願いを提出（布田より上妻へ）

* 全 三月、上井手と橋と樋の分 百八十一貫余 再度出方願いを提出（会所役人三名および布田連名）

* 四月十日に百貫目の郡からの出方許可

* この間に洪水で下橋用の材木や石材が損壊流出したと思われる（安政二年仮算用）

* 八月二日に残りの八十一貫余 出方許可（かなり特別の計らいであると強調）

* 台風の時期などを避けて十月の初め頃に下橋構築に取り掛かる。（記録にはなし。）

* 十二月、松板の樋を石の樋に仕替える、または石の樋を敷石代りにして松板樋を設置してもよいかと許可願いを提出。（松板樋の材料を用意した気配がない。）

* 十二月二十日に許可が下りてしまう。

* この後、結局橋の費用は最初の見積もり九十三貫余りから三百五貫余りになってしまふ。（嘉永七年の「恐れながら願い奉る覚え」）

* 嘉永七年三月から四月の間に、下橋を除去する。（記録にはなし、前年の洪水の経験から、この時期ではないかと推測。）

* 嘉永七年八月晦日 御奉行真野源之助、郡代上妻半右衛門、根取衆井上勝蔵他十人ほどが出席して渡り初め。男成上総、石工卯一、南手古老三夫婦など。

* 八月限をもって、上妻半右衛門転出。

* 九月十一日、上述の上井手、吹上橋と、下井手工事費及び板樋を石樋に仕替えた割増分の支払い通知が藩より新郡代蒲池太郎八に下る。

- * 安政二年卯十二月のご普請用帳の仮算用の合計では七百四十一貫七百五十八匁六分九厘で、当初見積り三百二十七貫七百三十二匁九分の二倍強になり、この間、工事経費の調達に追われている記録が多く見られる。
- * 安政三年辰正月、通潤橋の命名の書付が奉行真野源之助より渡される。

以上が架橋までのあらましの流れである。この後、下井手に関わる記録が続く。工事の進行状況、水車の設置願い、庄屋達との造り取り、祭事のこと、朝起こしを三度されたものの懲罰加役（名前付きで三名）など、当時の村々の状況が克明に描写されている。

古文書には全く馴染みのない私にとって、慣れるまでは正確に文意を汲むことが容易ではなかった。上述の田上氏は又石井清喜氏や布田家の御子孫をも紹介してくれた。石井氏は歴大な細川家の公文書「町在」の中より、嶋一革の名で埋もれていた通潤橋に関する最終報告書「御内意の覚え」など三綴りを世に出された史論家でもある。私は、この南手新井手記録に書かれている金銭に関わる数値が、「御内意の覚え」のそれと一致していることを確認した。通潤橋に関する資料の内、信頼できるものとして、布田保之助が残したといわれている「通潤橋仕法書」がある。現在の時点において、通潤橋に関して私の見る限りではあるが「南手新井手記録」、「御内意の覚え」、「通潤橋仕法書」が古文書の三種の神器に思える。この中に記された、矢部手永の南に位置する、水脈の断たれた台地の村々の田畑に奇跡の水を送り届けた一惣庄屋の灌漑事業は、彼が生涯を掛けて成し遂げた幾多の公共事業の頂点に輝いて見える。其の中に働き続ける布田保之助が私に教えてくれたものは、苛酷な封建農政末期下でありながら、田と水を農民の幸せの源と見据えて、多岐に亘る困難と闘いながら、政治と行政に命を燃やし尽くした一人の男の魂のあり方である。

この劇を書くに当たり、多くの方々のご好意、ご指導を仰いだ。解説をなさった甲斐保明氏を始め、林駿一先生、倉岡良友氏、飯星時春氏、山下市郎氏には貴重な時間と資料の提供を戴いた。又、石井清喜氏には、資料提供のみならず、劇の舞台美術に関する御協力も戴いた。心から感謝の意を表したい。

又、平成十三年に、通潤橋の補修工事を担当された尾上一哉氏には、架橋技術についての懇切なご指導ご意見を戴いた。教育委員会の方々にも多くの煩瑣な迷惑を掛けたのではなかろうかと思う。この場を借りて謝意とお詫びを申し上げます。

第一話として光を当てたのは表題の通りである。南手新井手記録はこの後もしばらく私と居をともにするだろう。田上彰氏にはご迷惑でも度々お付き合いを御願ひしたいと勝手に思っている。これからも、文書と文書の間、又、行間を埋める多くの史実が発見されて、劇の内容を豊かにし、この物語のテーマが、より多くの現代に生きる人々の魂のあり方に善きなものかを呈することが出来ることを願っている。

平成十六年九月

矢部町立図書館館長

前田 和興

戯曲 南手新井手記録

主な参考文献

- 南手新井手記録 矢部町立図書館収蔵 古文書 甲斐保明解説
御内意の覚 「嶋 一筆」 県立図書館収蔵 永青文库 町在 古文書
通潤橋仕法書 布田保之助 矢部町立図書館収蔵 古文書 山口 祐造 他解説
真野源之助日記 真野家所蔵 安政六、七年 古文書 真野家解説
通潤橋の工費・経済効果について 熊本史学 第78、79合併号 石井 清喜
通潤地区保全事業資料
通潤橋100年誌
上益城郡史 矢部町立図書館収蔵
矢部町史
砥川町史
蘇陽町史
新熊本市史 近世
肥後誌史総攬 上、下 鶴屋
肥後先哲偉蹟 正、後 武藤 敏男 編
熊本藩年表 森田 誠一
肥後藩の農村制度 内村 政光
国郡一統誌 北嶋 雪山
幕藩政下の政治と社会 丸山 雍成 編
幕藩体制の新研究 全
肥後国郷帳 熊本県資料集成
肥後藩の農民生活 全
肥後藩の政治 全
仁助翁 全
布田保之助惟輝翁 笹原 佐助 著
細川藩の終焉と明治の熊本
熊本 人とその時代 工藤 敬一 編
江戸時代の熊本 松本 寿三郎
日本の民族熊本 牛島 盛光
土貢管見録 菊池古文書研究会
原典による近世農政語彙集 森田 誠一 編
- 辞書類
古文書大宇叢 林 英夫 監修
時代考証辞典1～6 稲垣 史生
歴史考証辞典 全
続 歴史考証辞典 全
くずし字用例辞典

